

幕末明治の写真師列伝 第九十四回 宮下欽 その十六

松代藩の六番狙撃隊、八番狙撃隊の2隊は、長州藩兵と共に信濃川沿いに進撃した。(岸進撃隊) その後、長州藩兵と別れて笹花村に居た敵を敗走させ、続いて飯島の敵を追撃して、長岡城から南へ一里半の距離にある水梨村の敵を敗走させた。そして、飯島へ進撃してきた長州藩兵と再び合流して、長岡城から南へ一里半の距離にある左近村へ転じたが、敵は事前に築造した砲壘に抛り、激しく攻撃を仕掛けてきたため、苦戦に追い込まれてしまった。そこへ薩摩藩兵が来援して、敵に猛反撃したため、敵もついに砲壘を放棄して敗走した。これにより、長州藩兵と薩摩藩兵は協力し合って、信濃川の川辺の砲壘を攻撃して敵を敗走させる。この余りにも早い進撃に、背後に敵が迂回する危険を感じた松代藩兵も川辺を進撃し、この状況を信濃川の対岸の大本島より望見していた加州藩兵が、信濃川を渡って合流してきた。

そこで朝食もまだ取っていなかった松代藩兵は、川辺の警備を薩摩藩兵と交代して、朝食を取ることにした。すると長州藩兵が苦戦中との知らせが来て、直ちに出撃して、長州藩兵を救援し、敵の砲壘も奪取して、敵を敗走させる。この時にまた、松代藩兵が長岡城下の宮原に於いて苦戦中との知らせが来て、長州藩兵と共に直ちに救援に赴き、宮原の敵も撃退して長岡城下に入った。

長岡城下は敵の敗走の際の放火で、城中、城下、市中はことごとく火の海となっていた。そこで岸進撃隊は本道を進撃してきた3小隊と合流して、長岡城下の北口に集結した。蔵王村方面からも銃砲声が聞こえるため、全軍は共に進撃して、数日前まで松代藩の本営があった石内村に入る。敵はすでに石内村を撤退して、長岡城から北へ二里の距離にある下条村に敗走していた。

そこで松代藩兵は長州藩兵と共にこれを追い、池の島村まで追撃した。その間に信濃川の西岸にいた各藩の兵も相次いで草生津より信濃川を渡って、長岡に入り長岡城門外に集結して、城内の掃討にあたることになった。これにより7月25日に同盟軍によって奪還されていた長岡城はわずか4日で再び官軍の手に落ちたのである。

7月29日寅の刻(午前4時)、朝霧の中、同盟軍の隙をついて官軍は一斉に行動を起こしていた。それは、信濃川、妙見口より十日町、水梨、右近、宮原、長岡城内へ進撃してきた部隊の他には、信濃川、東村松、青木、上条、中沢、川崎、長岡城内へ進撃してきた部隊、信濃川、西本大島、草生津、中島、長岡城内へ進撃してきた部隊の4方面から長岡を総攻撃していた。

これに対して長岡、会津、米沢などの同盟軍は頑強に防御、抵抗していたが、いずれも征討軍の攻撃に敗れて、城内に火を放ち、一部は長倉口より栃尾方面へ、一部は新町口より福井村方面へと退却していった。征討軍は1隊のみ長岡城内の守備のために残留させて、それ以外の部隊は全力をあげて、北東の栃尾方面と片貝、栖吉方面の同盟軍の追撃に移った。

8月1日朝、与板口原村砲台(大砲2門)を守備していた松代藩七番狙撃隊は敵の砲撃が少ないことに気づき、敵を追撃して大川津村まで進撃した。

8月3日、松代藩七番狙撃隊は燕駅に進撃し、この地に砲台を2壘築いて、長州藩の大砲守衛を命じられる。ここに原村砲台にいた大砲隊司令番頭、金児忠兵衛が大砲隊(2門)を率いて合流する。長州藩は松代藩と燕駅の守衛を交代して、進撃してゆく。

8月4日、与板、山手、陣ヶ峰砲台を守衛していた六番小隊は、敵を追撃しつつ、燕駅に到着した。この時、茂新田、矢立方向に砲声が激しく聞こえてきたことから、斥候を出して敵の情勢を探らせたところ、加茂方面に残敵が集合しつつあることが判った。このため矢立、燕駅の守衛を越前藩兵と交代して、松代藩兵が加茂方面へ進撃することになった。この時の松代藩兵はおおよそ500名で、与板口より来援した松代藩七番狙撃隊、五番小隊、六番小隊と、九番、十番の大砲2門。出雲崎方面より来援した松代藩五番狙撃隊、二番小隊、十五番大砲1門であった。

8月8日、松代藩部隊は加茂駅を出発して、笹目、小面谷、三川、平出の山地を経て、阿賀野川西岸の津川にいた残敵を追撃して、8月14日、会津藩国境の上杉川村に到着した。奥羽越同盟軍はこのような追撃を受けて部隊は散り、指揮系統も大きく乱れて各方面で大きな打撃を受けていた。その結果は以下になる。

①征討軍に降伏した者

- ・見附にいた新発田藩兵(200)
- ・三根山藩
- ・黒川藩
- ・三日市藩
- ・村松藩の恭順派

②抗戦をやめて帰藩した藩

- ・米沢藩

③会津領へ敗走していった者

- ・長岡藩兵
- ・会津藩兵(下越、中越守備兵)
- ・桑名藩兵(下越、中越守備兵)
- ・旧幕臣、歩兵隊(衝鋒隊)
- ・水戸脱藩兵
- ・村松藩の強硬派

また、長岡藩の河井継之助は長岡城の奪還がなった25日午後、新町口に於いて征討軍狙撃隊の狙撃を受け、左足下腿に骨折貫通銃創を負って、四郎丸の昌福寺にあった同盟軍の病院に收容され、手当てを受けていた。7月29日、再び長岡城が落城した際には、見附に逃れ、さらに杉沢、葎谷(もぐら谷)を経て吉ヶ平に達し、此処より八十里越の難関を越えて、会津藩領の会津藩塩沢村の医師、矢沢家に仮寓して、療養していた。しかしながら足の創傷はますます悪化して、破傷風を起こして、8月16日、ついに亡くなった。享年45であった。その遺骨はまた鶴ヶ城(会津城)の落城前であったので、会津藩主松平容保公ほか多数の将士が参列して葬儀が行われて、会津若松の建福寺に葬られた。

(森重和雄)